

京都御所障壁画修理工事

1 障壁画概要

現在の京都御所は、嘉永7年（1854）の大火により敷地内のほぼすべての建物が焼失し、翌安政2年（1855）に再建された建物が多く現存している。これらの建築群は、寝殿造から書院造、さらには数寄屋造に及び、歴史上の代表的な建築様式が一定の空間に凝縮していながらも、互いに調和し、国内外から来訪する方々にわが国の悠久の宮廷文化を伝えている。

その価値は、建築物自体にとどまらず、内部の部屋を仕切る襖障子や床の間等の壁面には、各室の性格や機能に対応した「障壁画」が画かれ、その文化的価値を一層高めることとなっている。その総数は1,600面を超え、これらの大多数は、安政2年再建時に1年半程（嘉永7年5月～安政2年11月）の極めて短い期間内に制作されている。これらは、禁裏御用絵師である土佐派（住吉派含）、京狩野派、鶴沢派、勝山派、木村派のみならず、町絵師系のグループである円山派、四条派、岸派、原派までも参加し、当時の「京画壇」の力を結集した、総勢97名の絵師達による作品である。

画題についても「和」と「漢」で明確に区別されていることが注目される。紫宸殿をはじめとする公式な場においては、人物、花鳥、山水、走獣に大別される漢画が画かれているのに対して、天皇や皇后の生活の場となるような私的空間では、四季絵、名所絵等の大和絵固有の古典的な画題もみられる（図1、2）。

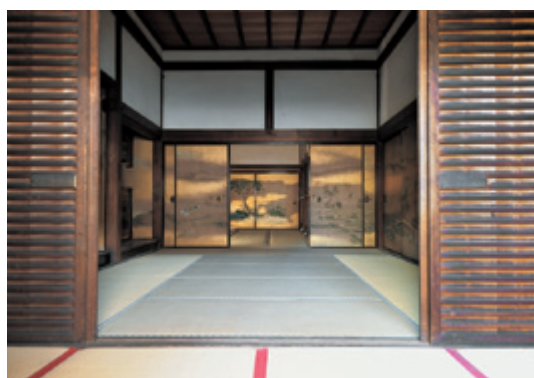


図1 皇后宮常御殿 一の間から御寝の間



図2 皇后宮常御殿 御寝の間

2 工事に至る経緯

京都御所の障壁画は、各室の性格や機能をはじめ、古代以来、京都を舞台とした宮廷文化の実態を伝えるかけがえのない文化財である。しかし、これらの障壁画が、経年や自然環境の変化による^{にかわ}膠（顔料の固着材）の弱化、あるいは虫害によって、破れ、亀裂、剥落等の損傷が著しくなり、早急に対策を講じることが必要となったため、武田恒夫氏（大阪大学名誉教授）及び冷泉為人氏（冷泉家時雨亭文庫理事長）により、平成6年3月から約1年10箇月をかけて、

1面毎の損傷状況を確認する現況調査が行われた（平成6年6月には宮内庁京都事務所に委員会を設置）。

本調査の結果、その半数以上に修復の必要性が見られ、緊急度の高いものも多数確認されたことから、当所において、大きな破れや亀裂が生じているもの、緊急的な対応が必要なものを優先して修復計画を立案することとなった。その後、平成10年度より障壁画修理工事を開始し、平成29年度までに、全体の約67%が完了した。

なお、修復を行うことのほか、今後の管理計画として、武田・冷泉両氏より、模写制作や原画の保存施設の必要性についてご指摘いただいております、このうち模写制作に関する事業については、令和元年度より「京都御所清涼殿障壁画保存工事」が開始されることとなった。

3 本工事の内容

3-1 工期と工程

本工事は、工期を平成29年7月28日～平成30年1月31日とした。工程は表1のとおり、現状調査後、壁面張付及び襖の修理を順次進めた上、点検・写真撮影を行った。なお、修理内容については、絵具層の強化を行った後に壁面張付や襖の解体、下張りの新調を行い、その上で絵画の画かれた本紙の張り込みを行っている。これらは株式会社松村泰山堂が請負い、本工事を行うに際し、冷泉為人氏及び小嵯善通氏（成安造形大学教授）に工事期間中に計4回、工事の進捗状況を報告し、京都御所内修理室において障壁画も実見していただき、処置方針を中心にご指導を受けた。

	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
現状調査	●	●					
壁面張付の修理		●	●		●	●	
襖の修理			●			●	
点検・写真撮影							●

表1 工程表（工期：平成29年7月28日～平成30年1月31日）

3-2 工事箇所

本工事の修理対象となる障壁画は、清涼殿8面（襖4枚）、御献の間7面（襖3枚、壁面張付1面）、参内殿8面（襖4枚）、御新建3面（戸襖3枚）、皇后宮常御殿18面（襖8枚、壁面張付2面）である（図3～5）。全般的に目立った損傷は少なく、予防的意味合いにより、いずれも下張りの新調を行った。その他、本紙（襖絵）へ影響が出ているものについては、本紙の修繕も併せて行った。

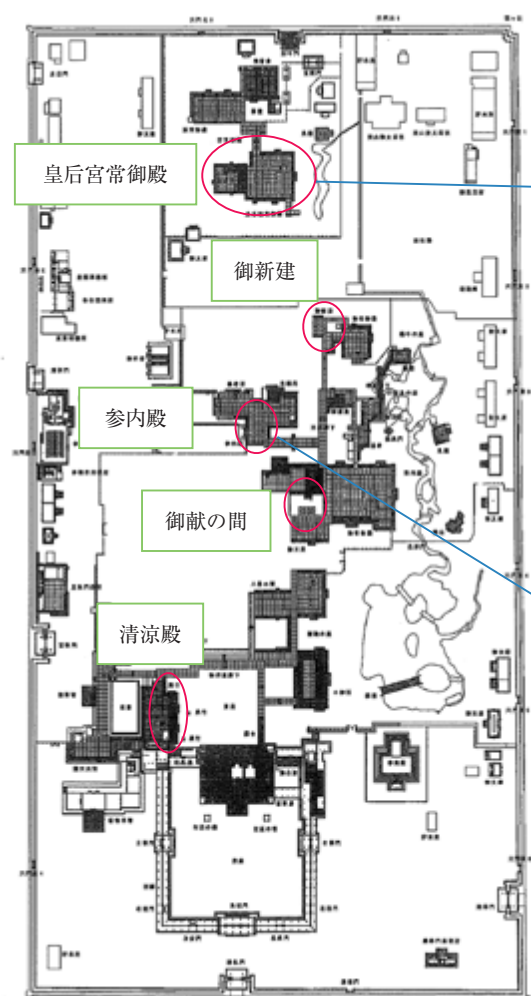


図3 京都御所平面図



図4 皇后宮常御殿 一の間
画題：倭耕作 筆者：原在照



図5 参内殿 上段の間
画題：漢の養蚕 筆者：土佐光文

4 修理内容

本工事の目的は、襖絵たる「本紙」を守ることである。しかし、本紙のみを修理することでその目的を果たせるわけではなく、その下に存在する裏打紙や下張り層を新調し、これらがその役割を果たすことで捻れや亀裂等の損傷を防ぎ、本紙の強度を保つことができる。よって、本工事は、障壁画を長年にわたり良好な状態で保持するためには極めて重要な工事である。また、絵具層の強化や顔料の剥落止め等も状況に応じて行っているが、本報告では、工程中「下張り層の新調」について詳細を記す。

4-1 襖等の構造

図6のとおり、襖の内部には、和紙を用いた数種の層が存在し、これらが襖等を維持する上で非常に重要な役割を担っている。一般の障子では、調湿や防音効果のある「蓑掛け」(図6襖の構造図③)について細長く作られた3層の和紙を張り上げるのに対し、京都御所の障壁画においては、5層の和紙を使用するという特色がある(4-2下張り・上張りの工程③参照)。

なお、図6で各層に付した番号は、4-2にも対応しているため、合わせて参照いただきたい。

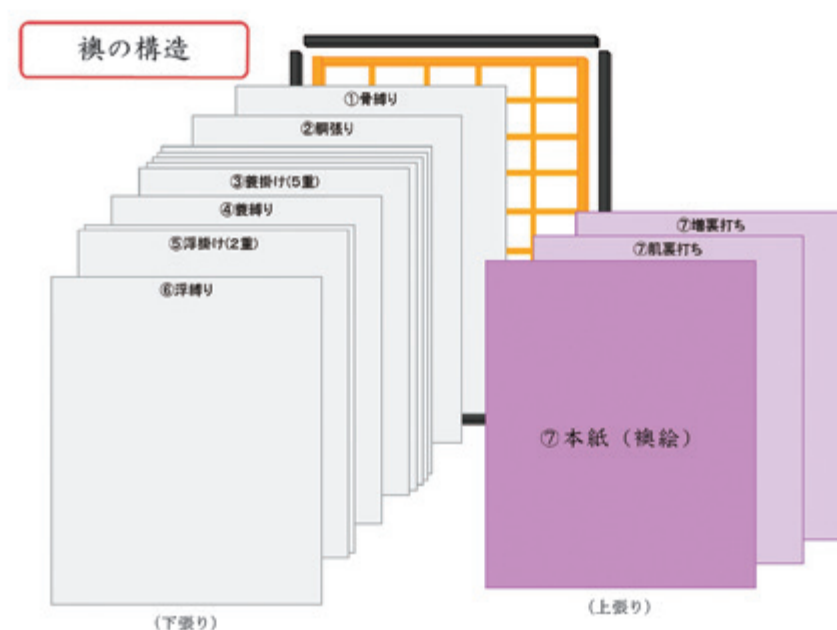


図6 襖 構造図

4-2 下張り・上張りの工程

ここでは御献の間上りの間の壁面張付、画題「嵐山春の景」、筆者「横山清暉」を例として、下張り及び上張りの工程を記す。

① 骨縛り

骨縛りは、組子下地（杉や檜を使用して格子状に組まれたもの）の両面へ紙を張る下張り最初の工程で、歪みや反りを防ぐ効果がある（図7、8）。紙は楮紙（クワ科の楮の樹皮の繊維を漉いたもの）（鳥取県青谷産）で、強靱で厚みのあるものを使用する。



図7 骨縛り施工の様子



図8 骨縛り完成

② 胴張り

胴張りは、ベタ打ち（全体に糊を付け張る）することによって、骨縛り紙を補強し、組子下地全体を強化する効果がある。また、泥土を混ぜた間似合紙（兵庫県名塩産）を使用することによって、光の透過を防ぐこと等についても効果を発揮する。



図9 胴張り施工の様子

③ 蓑掛け

調湿や防音の効果がある「蓑掛け」を行う。

5層の紙をずらしながら両端のみ張り固定することで「蓑」の形状となり（図10）、その空気層によって調湿や防音の効果があることに加え、クッション性、断熱材としての効果もある。紙は柔らかい楮紙（高知県土佐産）を使用する。



図10 蓑掛け施工の様子

④ 蓑縛り

「蓑掛け」が、蓑の形状となっており膨らみがあるため、平面化するために紙を張ることを「蓑縛り」という（図11）。紙は土台となるよう、しっかりとした厚さの楮紙（鳥取県青谷産）を使用する。



図11 蓑縛り施工の様子

⑤ 浮掛け（下浮け・上浮け）

浮掛けは、上張りとは下地を離し、下地の粗を目立たせないために行い、併せて、本紙の湿度変化に応じた伸縮を分散させ亀裂を防止する効果がある。小判の紙を少しずつ袋状（周りのみを糊付け）にずらしながら張り（図12）、下浮けと上浮けで、紙の繊維方向を変え、伸びの方向を分散させる。紙は丈夫で乾燥時には張りの出る楮紙（鳥取県青谷産）を使用する。



図12 下浮け施工の様子

⑥ 浮縛り

本紙を整然と張り上げるため、「浮掛け」の膨らみをその機能を妨げない程度に平滑にする「浮縛り」を行う（図13、14）。紙は楮紙（鳥取県青谷産）を使用する。



図13 浮縛り施工の様子



図14 浮縛り完成

⑦ 上張り

本紙を丁寧に張り（図15）、^{しぶいち}四分一や金物などを取り付けて完成となる（図16）。



図15 上張り施工の様子



図16 完成

5 おわりに

京都御所の障壁画の基底材は紙や絹を使用しており極めて脆弱なものである。しかし、これまで記載したとおり、古代以来の宮廷文化を伝えるという目的から、現在においてもその建物に設えられていることに重要な特色がある。中には建築物の性質上、大気と直接触れるような環境に設置されているものもある。

このような状況の中でも、平成10年度から行われてきた京都御所障壁画修理工事によって修理された障壁画は、現在でも概ね良い状態で維持されている（図17）。今後も本工事を継続させることに加え、自然環境に起因する変化を把握し、より長く良い状態で保存できるよう努めたい。

完成写真（例）

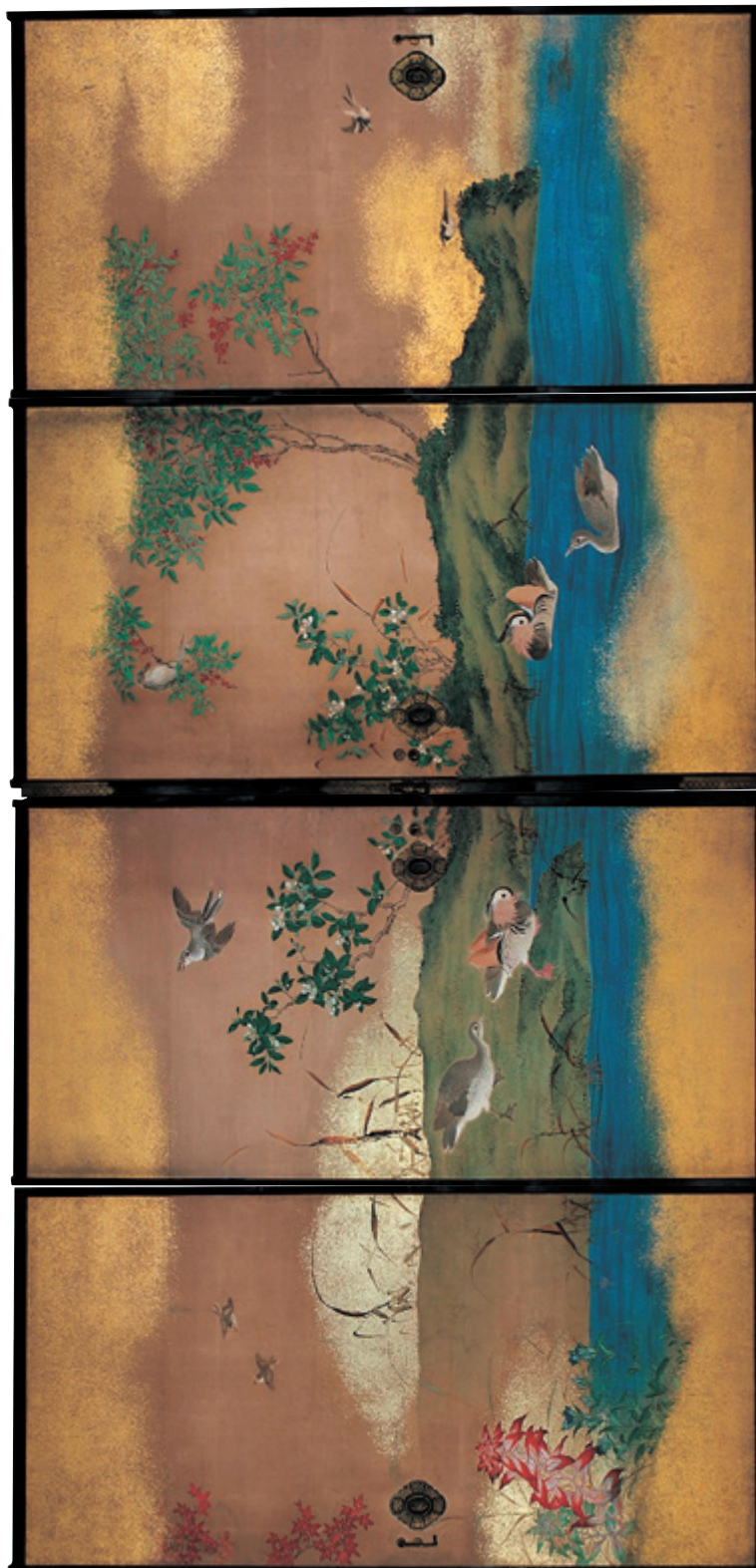


図17 皇后宮常御殿 御寝の間
画題：四季花鳥 筆者：岸岱

（管理課 山本徹也・石川明良）